

## 杲宝の円珍批判について

千 葉 正

本稿では、東寺観智院を開いた古義派真言宗の杲宝（二三〇六一—三六二）をめぐる、その杲宝教学解明の一端として、杲宝の台密観、今回は特に円珍（八一四—八九二）の説に對する批判の内容について検討、考察するものである。

まず、古義派真言宗の杲宝の立場からすれば、台密に對しては、批判的な態度を当然とっていると言えよう。そこで台密側では、一体誰の説が一番多く引用されているのかと言え、五大院安然、次に智証大師円珍の順なのである。従って本稿では、台密にとっては原点といえる説を立てていると思われる円珍の説の引用に對する、杲宝の見解を検討することにした。続いて、問題の所在である。古義派真言宗（東密）側の杲宝からすれば、前にも述べたように、台密の円珍の説は批判の対象となると思われるがでは、具体的に円珍のどのような説を批判しているのかが疑問といえ、それが問題の所在となる。

次に、具体的な検討に入る前に、本稿で取り上げたいと思

う円珍の教学の特徴を、次の一点にまとめてから、本稿を進めていくことにする。日本天台では、円・密・禪・戒の「四宗合一」の立場からの円密一致の思想が一番の特徴と言える。この思想は、空海の十住心の教判に對して、天台円教と密教との融合同一化を図ろうとして考え出されたものである。従って、紙幅の制限上、この「円密一致思想」を円珍教学の特徴としていきたいと思う。そこで本稿では、真偽問題が色々と存する円珍の著述の中から、『大悲藏瑜伽記』という書を取り上げてみることにする。特に「円密一致思想」の中でも、「釈迦・大日の一体化」という説が一番代表的な考えであると言える。すなわち、その典拠としては、『大悲藏瑜伽記』上巻において、次の様に説かれている。

歎問和上曰。大日与三釈迦為一為二否。和上答曰。本来一仏無有三体。但約機見似有其別。儀軌上鉢。索。心。臍。藏等印皆是大日尊。一身上事更無異也。（『智証大師全集』下巻、九五—五下）

ここでは、大日と釈迦とは本来は一仏で、二つの別の体のもではなく、それぞれの機見によってその別があるように見えるだけなのであると説き、さらに、儀軌の中の諸々の印などは、大日如来の一身上のこととして説かれていて、その上に釈尊の身上と異なることは無いと述べられている。なお論中の釈迦は、『法華經』『如来寿量品』の「寿量仏」とされている。正しくこの説は、「大日・釈迦の一体化」を説くものと言えよう。さて僅か一例だけではあるが、以上が円珍における「円密一致説」の典拠となるものである。

次に、杲宝の円珍の説への見解についての具体的な検討に移りたいと思う。本稿では、数多くある杲宝の著述の中から、『杲宝私抄』全二十四卷（『真言宗全書』二〇所収）を取り上げて検討することにする。この『杲宝私抄』は、古義派真言宗の宗義決撰書の代表的な書なのである。さて本稿では、次の様な二つの主題に分けてみたいと思う。まず第一は「顕密二教判の見解」、第二は「即身（心）成仏の問題」という二つである。

まず、第一の「顕密二教判の見解」についてである。この主題は、杲宝に円珍の説を密教の奥旨を知らない顕教に位置付けたようとしている傾向を示す箇所が見られるので、設けたものである。ここでは、『杲宝私抄』巻第二の「釈迦大日二仏同異事」という章を取り上げてみたい。この章に

は、前に述べた円珍教学を代表する「釈迦・大日の一体化説」について、一つの問答が設けられているのである。その問いの部分では、自門（東密）と他門（台密）とに分けた上で、他門の代表者として円珍の説を破す為の問いとなっている。つまりこの円珍の説とは、前の『大悲藏瑜伽記』に基づく「大日・釈迦二仏一体説」のことなのである。そこで、この問いに対する杲宝の見解は、

答。自他門各雖存<sub>レ</sub>兩義。自門意<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>法性有<sub>レ</sub>体相用三德。有三德。故<sub>レ</sub>仏身分齊又不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>混<sub>レ</sub>之是。両部曼荼羅釈迦大日三尊。并在位大別也。仍二仏体別。

と述べられている。ここでは、明確に自門においては仏身の区別がつけられていることを説いているのである。そのことは、「在位大別也」と述べたり、又、「仍二仏体別」と述べていることから言える。

次に、この「顕密二教判の見解」という主題についての検討のまとめとなる杲宝の見解に触れてみたい。ここでは、『杲宝私抄』巻第六より、「疏与<sub>レ</sub>義釈勝劣事」という章を見てみる。この章の主題は、台密で重視する『大日経義疏』全十四巻と、東密で重視する『大日経疏』全二十巻との勝劣の問題ということなのである。この章では、円珍の『大日経疏抄』という書の内容に触れて、杲宝は、「又文筆異<sub>レ</sub>常体<sub>レ</sub>。誠不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>師伝<sub>レ</sub>者。縦雖<sub>レ</sub>披<sub>レ</sub>文難<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>其意<sub>レ</sub>。爰智証大師未<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>」

「頭網」<sup>(2)</sup>と述べて、円珍の説は「頭網」を脱していない、つまり台密は密教ではなく、顕教なのであると判じている。これは厳しい批判的見解だと言える。

さて次には、「即身（心）成仏の問題」についての検討に移りたいと思う。ここでは、東密が「即身成仏」を立て、台密が「即心成仏」を立てることを論じたものである。そこで、『杲宝私抄』巻第一には、「即身成仏心勝劣事」という章立てられているので、その章を見てみたいと思う。この章では、問いの冒頭が円珍の『雜問雜記』からの引用で始まる。

ここでの円珍の説は、東密の「即身成仏」と台密の「即心成仏」とには、勝劣が無いということなのである。この問いに対して杲宝は、「心」と「身」ということに言及して、

論<sup>(3)</sup>二仏果<sup>(4)</sup>体性<sup>(5)</sup>二顯密<sup>(6)</sup>ニ教是別也。顯教意。仏性体其極在<sup>(7)</sup>心法<sup>(8)</sup>。凡有<sup>(9)</sup>心者悉有<sup>(10)</sup>仏性<sup>(11)</sup>ニ者此意也。密教意。仏性体所歸在<sup>(12)</sup>色法<sup>(13)</sup>。

と述べ、顕教の「心」と密教の「色（身）」との区別をつけているのである。そして結論としては、「大師<sup>(14)</sup>釈云。既<sup>(15)</sup>一心利刀<sup>(16)</sup>二顯教文悲哉古賢猶不<sup>(17)</sup>出<sup>(18)</sup>頭網<sup>(19)</sup>。」と述べて、再び円珍の説は顕教であると感情的に難ずるのである。つまりここでは、密教が「即事而真」を宗とすること、「色法」を重視し、「心」の方が劣っていることを示しているのである。

以上、簡略な検討であったが、「顯密二教判的見解」と「即身（心）成仏の問題」という二つの主題の下での杲宝の円珍

の説への見解をまとめるならば、やや感情的な批判であったということ、台密は顕教であると判じていたという二つの点にまとめることができるであろう。

- 1 『真言宗全書』二〇、二三下
- 2 『同右』、九八下
- 3 『同右』、一八上
- 4 『同右』、一八上

〈キーワード〉 円珍、大日・釈迦二仏一体、頭網、即身（心）成仏  
(駒沢大学大学院研究生)

## 新刊紹介

宮澤勘次著

### 四明知礼 観経疏妙宗鈔の研究

A5版・六九六頁・定価七、〇〇〇円

平成七年七月